

V 研究活動と研究環境

1 専任教員の教育・研究業績

(表24)

所属	職名 教授	氏名 小野 礼子	大学院における研究指導担当 資格の有無 (無)
I 教育活動			
教育実践上の主な業績	年月日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)			
英文法の習熟度別二クラスの指導方法及び事前・事後テストの使用による学修成果の可視化の試み	2018 (平成30)年4月～ 2019 (平成31)年3月	<p>英語観光学科の専門基礎科目Grammar 203 (1年次配当) の4つの習熟度別クラスのうち、習熟度が最も高い203sクラスを春学期に、習熟度が下から2番目の203-1クラスを秋学期に担当した。テキスト、取り扱う内容、授業の到達目標は2クラスで共通であるが、それぞれ異なる指導方法を用いて授業を行った。203sクラスでは、宿題に課したテキストの練習問題の解答について3～4人のグループで討議し、正解を導き出し、グループとして正解を発表するという方法を取った。比較的文法力のある学生たちで構成されているクラスであるため、自分たちで考えたり、議論を交わしたり、互いに教えあったりして正しい答えを導くという方法を取り、担当教員は、議論の過程を見守り、必要に応じて助言を行ったり説明を加えたりした。それに対して、文法があまり得意でない学生たちで構成されている203-1クラスでは、203sクラスで採用した方法は機能しないことが学期の開始後早い段階で分かったため、補助教材として練習問題のプリントを数多く作成し、問題をどんどんこなすことで正しい形式に慣れさせる方法を中心に授業を進めつつ、学生が受動的にならないよう、ペアで解答について話し合う機会も設けた。そして、学修成果を可視化できるよう、両クラスとも、第1週目の授業に事前テストとして50個の3択問題からなるテストを実施し、第16週目の学期末試験で同一内容のテストを学期末試験の一部として実施した。その結果、203sクラスでは、事後テストの平均スコアが事前テストの平均スコアよりも19.7%上がり、203-1クラスでは、事後テストの平均スコアが事前テストの平均スコアよりも12.3%上がったことがわかり、学修成果を見ることができた。また、指導方法について、それぞれのクラスに適したものであったことを学修成果から確認することができた。</p>	
2 作成した教科書、教材、参考書			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			

II 研究活動					
著書・論文等の 名称	単著・ 共著の別	発行または発表の 年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号 数）等の名称	編者・著者名 （共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
論文					
英語が苦手な学生対象の文法指導—現在完了形と現在完了進行形の定着を図る取り組み—	単著	2014(平成26)年3月	神戸海星女子学院大学 言語文化研究所 言語文化研究（創刊号）		67頁～92頁
"Speech Act Data and the Teaching of English Speaking to Japanese Students"	単著	2017(平成29)年3月	神戸海星女子学院大学 研究紀要（第55号）		21頁～30頁
III 学会等および社会における主な活動					
1992(平成4)年～現在	日本言語学会				
1996(平成8)年～現在	日本「アジア英語」学会				
1998(平成10)年～現在	社会言語科学会				
2004(平成16)年～現在	大学英語教育学会（JACET）				
2015(平成27)年～現在	日本語用論学会				
2015(平成27)年～現在	The International Pragmatics Association				